コールドウェルの描く世界

清水春雄

I

Erskine Caldwell の描く世界を、假りに鳥瞰圖的に眺めわたした場合、どのような景觀が特にわれわれの眼に際立つて寫るであろうか。勿論作家の長い經歷を考えるならば、初期の作品も後期の作品も同じ特徴を表わして、同一の畫面の上に凡てが描き盡されようなどとは期待出來ない。又若し所謂 myriad-minded な作家であるとして、描く世界が個々獨立の景觀を呈するならば、その個々それぞれに意義を持ち得るのであつて、強いて類似や一貫性を見出そうとしても、そのような企ては徒勞に歸するであろうし、又そうした努力は無意味でもあろう。併し突然變異はあるとしても、一應一作家の特定期に於ける作品群に、或る程度の類似性の存することは假定出來る問題であり、又作家が生涯に亘つて或る傾向を帶びている場合があるということも同樣假定出來る問題である。今 Caldwell の世界を見渡すとして、翼の進みと共に寫し出される山川の眺めに何らか似通つた特徴が認められないものであろうか。初めと終り――と言うても最近という意味――では、その眺めにどのような隔りがあるか。或は一貫した特色が見出されるのではなかろうか。

問題は結局 Caldwell の作品に表わされた內容的な特徴の異同或は推移を檢討することとなるのであるが、先づその初期の作品と後期の作品に於ける夫々の特徴を比較して見たい。尤も Caldwell の作家としての生涯は未だ終つたのではない。從來の旅の方向を延長して見ても、果して目新しい眺めに出会うかどうかとの疑問もあるであろうが、併し今後彼はどのような新天地を開拓して、從來とは全く別個の世界を描き出すかも計り知れない。隨つて後期という

語を用いるのは穩當ではないであろうが、比較的最近の作を概括するという意味でこの語を用いるものと解されたい。極めて概說的な試みではあるが、論を進める便宜の上から、初期並に後期の作品に表われている特徵のうち主要なるものを、次の如く摘出して見る。初期の作品としては *Tobacco Road*(1932); *God's Little Acre*(1933); *Journeyman*(1935) 等を中心として考えて居り、後期の作品としては *Episode in Palmetto* (1950); *Place Called Estherville* (1949); *The Sure Hand of God* (1947) 等を主として考えて居る。

Caldwell の小說に於ける諸特徵

特徵＼時期		初期	後期
素材・人物の性格	背景	田園	小都會
	人物	家族	個人
	職業	農業	雜（商工は稀れ）
	生活程度	最低又は低	低又は中
	知識程度	同上	同上
	信仰・信念	鞏固・頑迷	不安・動搖
	生活目標	物の獲得	平和な家庭生活
	行動	本能的（冷酷性あり）	反省的（冷酷性あり）
作品の傾向	思想性	經濟的社會抗議	倫理的社會抗議
	事件	物慾と性衝動	黑人問題及性的魅力
	喜劇性	自然主義的喜劇性	喜劇性の減退
	悲劇性	頑迷の悲劇	諦觀の悲劇
	態度・手法	客觀的自然主義	寫實主義（自然主義の後退）

II

初期の特徵として總じて言い得ることは、前表の示す通りである。南部の貧農の一家を舞臺として居り、隨つて一家の主人の日常の關心事は物にある。物

の獲得により生活の向上を希う。その底流の上に家族員或はその親近者の性生活の赤裸々な描寫を伴うものである。彼等の社会は物質的にも精神的にも全く外部の文明社会から孤立して、一種のエアポケットのように置き忘れられた社会であり、頑迷に迄異常な信條を抱く人々が描かれている。

Caldwell の貧農生活の寫實的な描寫は見事である。その背景は殆んど彼の生地 Georgia の田舎である。彼は1903年12月17日に同州 Coweta 郡 White Oak（Atlanta の東南約40哩の一寒村）に生れた。長老教会派の牧師であつた父 Ira Sylvester Caldwell の任地の關係で、少年時代の居所は南部各地を轉々としているが、15歳の時、父が Georgia 州の Wrens という町の教会に落付いてから、彼もその附近の土地に親しみながら多感な時代を過した。當時その町は人口一千位で、實際のタバコ路にも近いということである。

彼の描く世界はもとより小説という誇張はあるとしても、その基く田園の知識、この土地の風物及び言語を含めた貧農生活の實態についての知識は全く first hand なものであつて、彼の初期作品に見られる生々しい迫力は全くこの知識の完全支配の賜である。

彼の全作品を通じて言い得ることであるが、どちらかと言えば彼は風景描寫は好まないようである。田園の場合でも都会の場合でも、中心主題の動きに急であつて、風景描寫などに意を留めている餘裕がない。恐らく彼は Steinbeck の龜（*Grapes of Wrath*, ch. III）や蠅（*The Wayward Bus*, ch. III）などの動きを、もどかしく感じるであろう。Calbwell の作品では人物の劇しい動きの印象は殘るが、その人物や事件の場をとりまく町や野山の背景は全く模糊としている。併しそれはどこまでも彼が焦點を鮮明にしようとする意圖に基くものであつて、例えば初期作品のように家族を中心とする場合には、その家族員の動きの場たる家或は畑地そのものの描寫は極めて細かい。*Tobacco Road* の Jeeter Lester の家は、

The three-room house sat precariously on stacks of thin lime-rock chips that had been placed under the four corners. The stones had been laid one on top of the other, the beams spiked,

and the house nailed together. The ease and simplicity with which it had been built was now evident. The centre of the building sagged between the sills; the front porch had sagged loose from the house, and was now a foot or more lower than it originally was; and the roof sagged in the centre where the supporting rafters had been carelessly put together. Most of the shingles had rotted, and after every wind-storm pieces of them were scattered in all directions about the yard. When the roof leaked, the Lesters moved from one corner of the room to another, their movements finally outlasting the duration of the rain. The house had never been painted. (ch. I)

と描かれている。一軒の家の描寫にこれだけの行を用いるのは Caldwell としては稀有のことであるが、これはもとより風景としての點描ではない。Jeeter 自身の口から貧乏暮しの愚痴を聞くよりも、この雨もりを避けて逃げ廻らねばならぬガタビシの小作小屋が、一家の窮迫を明白に物語つている。即ち貧しさを寫さんが爲の必要からの筆である。

God's Little Acre では一家の働き場所としての家の附近の畑、今は金鑛掘りの爲に赤い泥土と黄色な砂の山に埋もれ、その間に廣い赤い穴の口から見える作物のない荒涼たる畑地が鮮かに浮ぶ。(ch. I, XX) これも周邊の風景としてではなく、黄金熱にとりつかれて家業を顧みぬ一家の生活振りを描く必要からである。序でながら後期の作品では個人を中心として居る爲もあるが、主人公の住み家の描寫は背景と共に極めて不鮮明である。都会の風景はすべて輪郭がぼやけている。

Tobacco Road の Jeeter の家は前述の通り粗末な安普請の小作小屋であつて、息子の Dude が羽目板にボールをぶつけると家全體がぐらつく程度のものである。この家をとりまく畑は雜草が莽々と生い茂つていて、もう七、八年も耕さぬままに放つてある。金がなくて植えつける棉の種子も肥料も買われないのである。春になつて他の百姓たちが播種の用意に雜草を燃やしはじめる

と、その煙の匂いを嗅いで Jeeter は氣が狂いそうになる。町の人が工場行きをすすめ、女房が工場へ行きたがつても彼は頑として土地を動かぬ。その土地も今では借金のかたにとられて、自分のものとしては一エーカーも殘つていない。もとの親方が農業に見切りをつけて町へ引越してしまつてから、土地と小屋を放りなげるように無賃で使わせて置いてある。

そういう土地であつても Jeeter の土地への愛着は極めて強い。「俺は五十年も百姓をして來た。親父も祖父も百姓だつた。土地が俺をつかまえて離さぬ。他の奴らのように綿工場なんぞへ行きはせぬ」(ch. II) と言い、「工場は人間が作つたものだが、畑は神様のお造りになつたものだ」(ch. III) と、土地への執着は神への信頼につながつている。彼は一生親方の爲に働いて來た。そして神様にはするだけの事はして來た。その自分がどうして今無一物になつているのか譯が解らなかつた。併し神様は人間の面倒を見て下さるものだから、きつとやがて種子も肥料も授けて下さるだろうと待つている。神様は金持が貧乏人から取り上げたものをきつと返して下さるに違いない。そのうちには親切な神様は慈悲をお垂れになつて、着物でも食べものでも不足のないように惠んで下さるに違いない、と揺るがぬ神への盲目的な信頼を持ちつづけている。

彼の家には財産と覺しいものは何一つない。抵當に入れて金を借りるにも品物がない。町の屑鐵屋でも相手にしてくれなかつた古自動車が一臺あるだけだ。それも今はタイヤが全部傷んでいて、何とか修繕しようと焦つている所である。畑の準備の金がない計りか毎日の食物が殆どない。There had been very little in the house again that day to eat ; some salty soup Ada had made by boiling several fat-back rinds in a pan of water, and corn bread, was all there was when they sat down to eat. (ch. I) *Tobacco Road* は Jeeter 一家が娘の亭主 Lov の運んで來た蕪菁を奪い取る場面で初まるが、これは先づ農民の空腹によつてその貧しさを世に訴えている。

God's Little Acre の TyTy 一家も貧しい。食物の不自由なことも使つてい

る黒奴等に食物を請求される場面が先づ示している。この一家は秋から冬にかけての生活費がないので、町に住んでいる長男から借りたいと思つているが、彼等は *Tobacco Road* の家族程には窮迫していない。TyTyが長男の家に借金に行つた時、"There's no sense in a man with a hundred acres aud two mules having to run to town every time he needs a bunch of beets. Raise it on the land out there." (ch. XII)と息子にきめつけられているが、これは正にその通りなので、黄金熱にとりつかれているTyTyは家に居る息子二人と小作の黒奴等に手傳わせて、過去15ケ年も自分の畑で金鑛掘りを續けて居り、土地の大方は大きな坑と土盛りの山で荒されて、棉花作りは殘りの土地ほんの一部だけにすぎない。百エーカーの土地を持ち二頭の騾馬を持つている農家として、畑作に專念すれば、充分に暮して行ける筈なのである。永年畑作を殆んど顧みなかつた爲の貧乏なのである。家の者や小作の黒奴二家族の食糧や、騾馬の飼料を買う金もなくなつて、とうとう平素相手にされない長男の所へ無心に行く始末となつた。

このように日々の暮しにも困りながらも猶金掘りはやめない。他人が何と言おうと自分の「科学的方法」で續けて行けば必ず探し當てられると確信している。貧しい Jeeter が神を深く信じていたようにTyTy も信心深い。自らも "I've always been a religious man, all my life I have." (ch. II)と言つているが、彼は27年前いま持つている土地を買つた時、そのうち一エーカーを神様に捧げる爲にのけておいた。そしてその一エーカーの土地から穫れるものはなんでも毎年教会へ持つて行くことにしていた。どんなに少ないものでも自分の持つているものは神様と頒け合うことを自慢に思つている。黄金熱にとりつかれてから神様の土地を掘り返すことを惧れて、又同時に息子等は神様の土地で鑛脈に當つて金を牧師にとられることを惧れて、その一エーカーを農場中のあちらこちらへと移している。今では何も植えず雜草の生えるままになつている。この物語の中だけでも最初は向うの森近くにあるのが、そこを掘りたくなると、家の下 (ch. III)、農場の裏手 (ch. VIII)、又家の傍 (ch.XVIII) へと移している。移し方は簡單である。先づ最初の家の下に移す場面を見よ

う。息子らが向うの神様の土地の下に金鑛があるような氣がすると主張するので父は又その土地を移すことに腹をきめる。何處にするかという段になつて嫁がヒントを與える。

"Why don't you put it over here where the house and barn are, Pa? Griselda suggested. "There's nothing under this house, and you can't be digging under it, anyway."

"I never thought of doing that, Griselda," TyTy said, "but it sure sounds fine to me. I reckon I'll shift it over here. Now, I'm pretty much glad to get that off my mind. (ch. III)

と TyTy はもう安心している。そこに居合せた客の Pluto が、早くも移したのかと訝つてたずねる。その應答は次の通り。

Pluto turned his head and looked at TyTy. "You haven't shifted it already, have you, TyTy?" he asked.

"Shifted it already? Why sure. This is God's little acre we're sitting on right now. I moved it from over yonder to right here."

You're the quickest man of action I've ever heard about," Pluto said, shaking his head. "And that's a fact." (Ibid.)

この通りいと簡單に手早く片付く。決して神様の土地を失くすることには賛成しないが、扱いはこのように手輕に濟む。それは彼が神様を自分の心の中の問題としているからである。再度家の傍に移してからはもう動かすまいと心に誓つたが、息子 Buck が間もなく兄を殺し、その罪に自らの命を絶とうと家を去る時、TyTy は神様がこの息子を守つて下さるようにと念じて、彼の行く先き先きにその土地が移つて行くように祈る。(ch.XX) Buck が罪を犯す前の晩に TyTy がこの息子に云い聞かせている言葉があるが、そこに彼の神觀が窺える。「お前も心の中に神様を持つようになれば、生きて行くことが夜晝努力する甲斐のあるものだと解るだろう。わしは教会で聞かされる神様のことを云つているのじやない。からだの中におられる神様のことを言つているんだ。こ

の神様が生きて行くのを助けて下さるのだから、ほんとうに有り難いと思つている。だからわしは初めつから神様に一エーカー捧げているのだ。わしはどこか身近な場所で、そこに立つて神様を感ぜられるような所を持つていたいのだ。……お前たちは見たり觸つたり出來るもののことしか考えないようだが、生きるつていうことはそんなものじやない。心の中に感じることの出來るものが大事なのだ。そりやたしかに神様はあの土地から一ペニーも貰つていない。だが肝心なことはわしが神様に捧げる土地をこしらえた事實だ。それは神様がわしの心の中にいらつしやる證據だ。」(ch. XVIII) このように神を信ずることの篤い彼ではあるが、同時に彼の自己信頼も強く、金鑛發掘の手はゆるめない。自己の所有地のどこかに必ず金があると信じている。兄弟喧嘩の血で庭先を汚されて、念願していた家内平和の夢が完全にくつがえされても、依然として彼は坑掘りをやめない。

神を心に抱き乍らもなお物への執着に囚われている家長の姿は、これら初期の作品に共通である。事件の型は異るが *Journeyman* の中の農家の主 Clay も神を怖れ又神を求めている人物である。併し物語の興味はその底流にあるのではなく、その流れの表面に浮び出る次々の事件——主として性的な——にある。性の問題については項を改めて論ずる。

以上の諸點を後期の作品と比較して見よう。後期の特徴として總じて言い得ることは前に掲げた表の通りである。南部の小都会を舞臺として個人——その多くは女主人公——が中心であり、彼女らの最大の關心事は正常の結婚をして平和な家庭生活を營みたいという希いである。この希いの實現を阻み妨げる次々の事件の發生と、彼女等の終局の諦め或は自棄に共通の結びが認められる。

Caldwell に於て都会生活の描寫が、田舍のそれに比べて著しく生彩を欠いていることは先に述べた。殊に風景描寫はここでも餘り問題にされていない。例えば *Episode in Palmetto* では女教師 Vernona が政治家 Milledge とドライヴする町の郊外には、Palmetto（矮生の棕櫚の一種）の立ち並ぶ道路（ch. IV 3）が目立つ位のものであるが、それとても此の町の名の由來するところを説明するために描かれたものである。Vernona は下宿しているが、そ

の家は白塗りの二階建という以外は殆ど説明がなく、部屋の描寫も乏しい。これらは *Tobacco Road* の家と比べて甚だ朦朧としている。*The Sure Hand of God* の Molly 母子の住居も輪郭が判然としない。併しこれは知識の問題ではなく寧ろ要否の問題であろう。初期の作品では貧しさを表わす爲に主人公の身邊、その境遇の細かな描寫をも必要としたのであるが、後期の場合は大體に於て中流に近い生活を扱い、事件の發展と主人公の心理の動きを描くのが急で、背景描寫は疎んぜられているのである。

初期の作品では主人公の信心振りを述べたが、後期の作品では全く神信心の話が出ない。又信念も常に動搖している。女主人公達は始終不安の念から脱れられない。そして結局惧れ避けていた運命に恰も神の確かな手に導かれる如く引き入れられる。結びもすべて決定論的な宿命觀を感じさせられる。

Episode in Palmetto の主人公はカレヂ出の女教師 Vernona であるが、彼女は一二年田舍で勤めてから平和な家庭生活に入ろうと望んでいる。New York で自墮落な妾ぐらしをしている姉があるが、自分は決して姉のようにはなるまいと希つている。所が彼女の美貌が多くの男の禮讃と女たちの嫉妬をもたらし、爲に着任一週間で、この町に過去數年なかつたようなセンセィションを卷き起し、遂に避けようとしていた運命に屈して妻のある男と旅に出る。

Place Called Estherville では町に出て仕事を見つけ平和に暮そうと、田舍の学校を卒えてやつて來た混血兒の姉弟 Kathyanne と Ganus が、これも努めて避けようとする事件を美しきが故に次々と惹き起し、最後には弟は白人に撲殺され姉は白人の子を生む。

The Sure Hand of God では夫に死別して糧道をたたれた Molly が、娘 Lily を適當な相手に嫁がせ、自分も早く再婚したいと希うが、昔の身持が惡かつたという評判が祟つてまともに世間の相手にされず、とどのつまりは娘は出奔し、自分は赤線區域の女將となり下る。

女教師には自らも感じている自分の性的魅力が、或は制御を超えて何時事を起し失職を招くかも知れないという不安、混血兒には colored people をねらうことをスポーツの如く心得て居る白人社会に於て、如何に彼らと事を起さず

に暮せるかとの腐心、寡婦には前身を問題にされ世間の除け者にされ又闇の女に顚落しはしないかという懸念、があるがいづれも慎み深く世を渡ろうとする善意が彼女等を斷えざる不安に陷れている。併し彼女らはいづれも神に縋ろうとは考えていない。これは初期作品に於ける盲信的な態度とよき對照をなしている。

Ⅲ

前項は初期と後期に於ける諸特徴のうち、互に對照をなすとみられる點を主として考えたのであるが、次に兩期に相通ずる特徴について考えたい。第一に性の問題、第二に冷酷性の問題について述べる。

Caldwell の描く世界は D.H.Lawrence の如く「性に憑かれた男」と言う程ではないにしても、兎に角何等かの形で性の課題を離れ得ない。性の取扱も上流社会の遊びとしての性の問題は表われない。有閑階級の悅樂の爲の放恣な肉慾や腐敗した遊蕩の世界などは主題にならない。殆どが下層社会に於ける原始的な本能の欲求を描いている。概していえば初期の作品ではその性行動は衝動的であり描寫も赤裸々である。後期の作品ではその行動も幾分思慮を交え反省的である。

Tobacco Road について見るに、先づ Ellie May と Lov の出会の場を考えたい。Jeeter の娘 Ellie may は、妹 Pearl が12歳で結婚しているのにひきくらべ彼女は未婚である。18歳になつているが三つ口で誰も相手にして呉れない。Lov は Pearl を嫁にしたがこの12歳の少女は寢床を一つにすることを肯んじない。Lov は Pearl の垂れ髪の後姿の美をたたえて溜め息をついているだけである。この美しい少女を手離したくないとは思いつつも一面「他の女を欲しい」と考えている時である。"Right now I feel like I want a woman what ain't so——" (ch. I) Lov が町で買つた蕪菁を持つて Jeeter の家に立寄つた時 Ellie May が覗りながら進んで來たのは、蕪菁を求めての口腹の飢ではなく、Lov なる「男」を求めての性の飢である。Lov が Fuller の町から七哩半もの道を苦勞してかついで來た蕪菁を、Jeeter に奪われるかも

しれぬという危險を目の前に感じながらも猶 Ellie may の「女」に誘われてゆく。食の飢より性の飢が强いのである。この飢を滿たす爲には周圍で見守る Jeeter の家族や、通りがかりの黑奴たちの嘲笑も問題ではない。

女牧師の Bessie は39歳の寡婦である。彼女は男を迎えて飢を癒すと共に、その夫を牧師に仕立てたいと望んでいる。併し鼻の低いこと鼻孔が二連銃の銃先の如くに見え、普通の男は相手にしない。こういう折に見込まれたのが Jeeter の末子で16歳の Dude である。Jeeter の家族のため次々に祈りをする際 Dude の番がくると抱いて離さぬ。牧師らしくないと言われても平氣である。Dude は Bessie が前夫の遺產で買つた新品の自動車を運轉し、無暗にラッパを鳴らすのが嬉しい程度の少年に過ぎないが、彼女は男として愛撫する。彼女はこの夫 Dude と Jeeter との三人連れで Augusta の町へ自動車で薪を賣りに行くが、宿に泊つたとき一晩中他の部屋を轉々と廻り歩いていて彼らの部屋に歸らなかつたのも、素性が素性だけに（淫賣、ch. XVII）まだ子供の夫では滿たされぬものがあつたからであろう。併しこの Ellie May や Bessieの行動は境遇上の一時的な飢とも見られる。

これに反して *God's Little Acre* に於ては性をその本質に於て把えようとしている。ここでは性本能について人間には二つの型があると見られている。一つは動物型であり他は人間型である。前者は裸の人間、male, female とみられる人間、直接神の世界に住む人間であつて、後者は衣服を纏つた人間、humanize された存在としての人間、牧師の說く世界に住む人間である。

この作では Griselda は勿論、女はいづれも動物型であるが、男ではこの兩型が截然と分れている。TyTy と Will が動物型で Buck や Pluto は人間型である。この作のもつ暗示の一つには兩型の不調和が悲劇をもたらすということと同時に、男性に比し遙かに多くの女性が動物型であり、その不均衡に人生の悲劇性が內在するという點がある。

TyTy の娘 Darling Jill は奔放である。彼女には Pluto という崇拜者が居つて叩かれ嬲られてもついてくる。この男は檢察官の選擧に立候補している善良な內氣な紳士である。非常に肥滿型で性少しく魯鈍であるが、Jill は內心で

はいづれこの男と結婚しようと思つている。こういう男があるにも拘らず Jill は落付いていない。姉の夫 Will とも、又占いに連れて來た白つ子とも交渉を持つ。他人の見ているいないは意に介しない。事實まだ獨身であるので Pluto との間にも爭が起きないが、彼女の考えは「結婚などしなくとも、好きなことは出來る」（ch. IX）と言うにある。

二男 Buck の妻 Griselda は穩かに夫に任えてはいるが、自分の價値を認めている舅の TyTy と義兄 Will には好意を持つている。TyTy は老齡で、口では挑發的なことを言うが人間が枯れていて危險性はない。相當の分別がある。併し Will は口には餘り出さないが思うことはやり通す行動型である。妻を奪はれるとの懸念を抱く Buck は常に Will に憎しみを感じている。同型の Will と Griselda の接觸の場がこの作のクライマツクスをなしている。

Will は TyTy の長女 Rosamond の夫であつて Scottsville という工場町に住んでいる機織工である。ストライキ騷ぎで閉鎖されている工場に乘り込み、動力スウイッチを入れた爲に会社側に擊たれるのであるが、この英雄的な死の前夜こそ彼が同型の Griselda を贏ち得て獸的性本能の焰を完全に燃やし盡し、性の勝利者として存分に思いを遂げるのである。工場乘取りを決行しようと腹を定めて家に歸つた Will は妻や Darling Jill や Pluto などが居合わせることも氣に留めず、義妹 Griselda に向つて言う。"I'm as strong as God Almighty Himself now, and I'm going to do it.……I'm going to look at you like God intended for you to be seen. I'm going to rip every piece of those things off of you in a minute."（ch. XV）俺は全能の神の如く強い。神の思召通り裸の姿でお前を見るのだと Griselda の衣服を次々に引き裂く。狂氣の如く手早く細かにひきちぎる。身につけていたすべての衣類は、プリントのボイル地の服、白いスリップ、絹の下着も、細片となつて部屋中に舞い散る。機織工として一生を織り上げに捧げて來た彼は、今その織物をひきちぎりひきちぎりして、もとの一本の纖維にひき戻している。衣きせる人間の所行に呪いあれと言うが如くに。

傍に居る二人の女たちは、激しい命の息吹きが怒濤の如く部屋を吹きまくつ

て行くのを感じ喘いでいる。男の Pluto はただ呆氣に取られているだけで、それ以上の感動を示さない。Will が Griselda を抱えて隣室に去つたあとも Darling Jill は猶自分の胸のはげしい鼓動におびえているが、妻の Rosamond は意外に美しい清朗な表情になつている。この妻は夫のこうした行爲に常に平靜なのではない。先に Darling Jill と夫との出会の場を見出した時には、思い切り二人を打擲しその上ピストルを持ち出して夫を脅している。爲に Will は素裸のまま窓から逃げ出さねばならなかつたにも拘らず、この場合は不思議に嫉妬が表われない。Will が神のように強いと言つた時の神は、獸の如く本能のままに動くという意味であろう。神と本能と獸性とは一に歸する。Rosamond は自分が人間であるよりも、より根本の獸としての己れを見たのであろう。そして完全な雌雄合一の性の極致に人間的情意或は知性以前の生そのものを感じたのであろう。

Will は行動型であまり意見を吐かないが、「奴 (Ruck) がしよつちうあの女 (Griselda) を使つてるというわけにはいかん」(ch. V) という言葉にその性觀の一端が窺える。彼は男として生來の魅力に富んでいた。そのことは女たちが彼に夢中になるのも無理がないとして黑奴らが、"Because Mr. Will just naturally made them all that way."(ch. XIX) と言つている言葉が裏書している。

同じく動物型ではあるが TyTy は年齡の故で分別がある。「一年中さかりのついている男には分別がない。」"There ain't no sense in a man going rutting every day in the whole year." (ch.I) と言うだけのことはある。併しその彼も自ら氣のつかない大きな間違いを犯している。彼は家の大黑柱で家内の平和を心から望んでいる。そして「家にこんな綺麗な娘たちがいると、ごたごたが起るんじやないか」(ch. IX) とも心配している。その彼が嫁の Griselda の美しさを極度にほめる。本人には勿論息子らや他人の前でも公然と吹聽する。「見事な乳房だ。その前にひれ伏したくなる。」(ch.III.IX) 「あの子を見てると何かむづむづする。」(ch. XII) 等々己れの動物的感覺で認めた限りの美點を擧げる。「あの娘は見せる權利がある。」(ch.IX) 「他所

の男があれを好くとしても、止めさせる譯にはゆかない。」(ch. XIV) と賞讃しつづける。自分はそう語るだけが嬉しいのだというが、聽き手は尠からず心を動かされる。それが事を起す原因となることに氣づかぬ。

併し彼は兄弟らが女を奪い合うことを怖れて Buck に、「神様の思召通りの生き方をするのがほんとうの人間の道だ。娘たちは神様のお考え通りの生き方を喜んでいる。そして男女仲良く暮すのが神様のお心だ。」(ch.XIII.XX) と教える。彼は Griselda が生きる秘密を知つているのにその夫の Buck が動物的センスの足らぬことを齒がゆく思い「人間の中には犬が生れつきもつているセンスを欠いているものがあるが、情けないことだ。」(ch.XIII) と Griselda に語つている。併し彼はこのセンスは結局說いても仕方のないものであると氣づいている。心の中の神はあるかないかの問題で、自分が感ぜねば駄目だと覺つている。(ch. XIX) 即ち性に關する限り動物型の勝、人間型の負を認めているのである。血を見る兄弟喧嘩を起した後で TyTy は、「男でも女でも獨占しようとするから騷ぎが起る。」(ch.XX) と迄極言しているが、こうして事の起るのも結局、「神様は動物のからだをわれわれに與えておいて、人間の行動をとらせようとなさる。そこに何か惡だくらみがあるのだ。」(ch.XX) と感じている。

Journeyman に於ては、牧師 Semon は勿論であるが、Clay の若い15歳の妻 Deve にも動物型が表われている。Deve は Semon を初めて見た時、Clay が氣味惡がつているにも拘らず、「おお素敵だ」と叫ぶ。"He's the handsomest thing." (ch.III) "He's the potentest thing." (Ibid.) "He's the strongest man." (Ibid.) "He's the funniest man." (ch.IV) "He's the potentest man." (ch.IV) と、夫の威嚇にも拘らず關心は高まる。そして最後は、"I love the Lord." (ch.XV) と繰り返し叫び乍ら Semon にからだを任せる。その Deve は初めて關係を持つた黑奴についても、「あの人は黑奴ではない、男だ」(ch.XV) ときつぱり言い得る女であるが、Semon は最初から Deve は anticipating girl であると評している。

Semon は惡辣な巡回牧師であるが、女を馴らすには臀部を輕く打つに限る

と心得ている。百姓が牛馬をなづけるのはこの手による。Lorene に「貴方は牧師か、淫賣屋の亭主か。」(ch.VIII) とこき卸されているが、女を利用する trick は巧みである。神への歸依も性的興奮を利用していると見られる (ch. XVI の說教——若い男女の純潔を失う話)。又說教場で信仰に入ろうとする時、Lucy Nixon が狂つたように着物を引きちぎり裸像となつてうち震えるが、牧師はこれを聽衆に示す。40人餘の会衆は悉く興奮の坩堝にたたきこまれる。或は飛び上り或はうち倒れのたうち廻る。種馬の如く飛び廻る男たちもいる。(ch.XVIII) こうして悉くが神人合一の境地を味うが、ただ一人發心せず平然としているのは Clay の前妻で現在闇の女である Lorene だけであつた。初期の作品では以上の通り性行動は衝動的で獸的であり、他の對人關係などを考慮しないが、後期の作品では前述の通り主として小都会を舞臺として居り、登場人物も比較的知的な行動をとつている。隨つて顯わな性行動も營まれず、相當思慮があり反省がある。Caldwell の關心はこのような獸性の直接表現を離れたらしい。各作品の女主人公は何れも性行動については passive の位置にある。

Episode in Palmetto に於ては、女教師 Vernona の魅力に對する男性の反應を描いている。彼女が美しく、服裝も綺麗に整えて居り、田舍教師としては派手な存在であつて、それだけでも附近の女たちの反感を招いている。この點は Caldwell の母が父の牧師と結婚して始めてその任地 White Oak へ赴いた時に、牧師の妻としては餘りに若々しく、衣裳は派手すぎるとして土地の婦人連の敵意を招いたという事件を思はしめる。(註1)Vernona は自己の挑發的な胸の美しさを覺つている。そして決して男嫌いではなく、Washington で妾暮しをしている姉と性質が非常に似ているという自覺もある。それ故に彼女は出來るだけ早く正常な結婚をして身を固めようと考えている。

所が赴任早々に受持の男生徒 Floyd から愛を求められる。彼女はこの少年が何か强く訴えるものがあるとは認めるが、自分は22歲、少年は16歲である。それに教師と生徒という關係を考える。そうして一生徒の感情よりも自分の教師として經歷——たとえ短かくとも——の方が大切であると考える。こうした

反省にも拘らず、下宿近くまでついて來た少年へ別れ際に熱いキスを與える。少年が執拗に機をねらうようになつたのは勿論である。Vernona は己れの衝動的な行いを深く悔いるが、内心惹かれるものがある。Floyd が身近に來る度に強く抱きしめたい衝動を感ずるが、その都度つとめて感情を抑えている。そして極力少年を避ける。政治家の Maugrum に求められるままに近づくのも誰かに賴つて居らねばとの懸念からである。併しその政治家に妻のあることが判つてからは、現實的な行き方をせねばならぬと悟る。相次ぐ事件の最後は Floyd の無理心中を仕損じた自殺となるが、Vernona の告白は、"I liked Floyd very much. I was glad he liked me. I wanted so much to be in love with him, but I wouldn't let myself. If I had had the courage to go away with Floyd——even married him——I might have been happy with him for the rest of my life. It was the only chance I'll ever have to be really happy……. Everything is all over now." (ch. X 3) と言い、Floyd と一緒になつていたならばと歎いているが、自分が自らの本能の叫びを抑えていた爲に万事休すの破目になつたと氣づく。そして "I can't keep on pretending any longer" (Ibid.) と本能の命ずる儘に、妻ある男 Thurston と手をとつて Chicago へ旅立つ。

興味のあるのは下宿の亭主 Ash の Vernona に對する評である。Ash は Vernona がカレツヂ出の教養を以て包んでは居るが、そのひそむ獸性を見ぬいて居り、彼女の性的魅力の効果を高く評價している。例えば結婚生活について、ふんぎりのつかないままに穴にこもつているような男性をいぶり出して、back bone を固めさす引火奴(ホクチ)の如き役目が彼女の魅力にあるとしている。そしてそれが学校の授業に劣らず人助けになると賞讃する。"The spunky thing about you, Nona, is that you've got a knack for smoking folks out of the holes they crawl in. Maybe that's just as good a deed as teaching school, in the end." (ch. IX 3) 事實 Jack Cash は過去15ケ年、新任教師訪問一番乘りのレコードを持つていたが Vernona に一撃を喰つてから倉皇として結婚生活に入り、同様斷られた農家の Em Gee も急に緣つづき

の娘と結婚話を進める。校長は妻君の醜さが鼻につき出し、下宿の隣室の夫婦喧嘩は愈々度を加える。Vernonaの挑發力は大きかつたが、併し彼女自身の行動は反省的で passive である。

同様に *Place Called Estherville* の女主人公 Kathyanne も黄金色の肌をした attractive な mulatto（白黒混血兒）で、その美貌は町の白人らにとつて餘りにも強い誘惑であつた。Colored girls を追ひ廻すことが月並なスポーツであるようなその地方の社会に於て、白人との間に事を起すまいと、ひたすら念じている彼女の行動は勿論 passive である。Kathyanne の弟 Ganus を中心とする問題は中流家庭の淫蕩性が主であつて、彼は淫奔娘や闊さびしい寡婦らの餌食となるが、常に被害者の立場である。この姉をめぐる物語と弟をめぐる物語との間には何ら關連性がない。平穩な生活をしたいという希いと、白人の性慾の對象として狙らわれる點に於て條件が同じであるが、双方の事件には何の脈絡もない。虐げられる colored people の姿が訴えられているが、性の問題としては、體色の如何に拘らず美女に啓發性ありと感じさせられる以外には本質的なものが描かれていない。

The Sure Hand of God の Molly は小作農の家に生れたが12歳の時兩親に死なれて、それ以來地主の農家に引取られていた。そしてその農家の主人か、或は二人の息子のうちのいづれかを父として、Lily という娘をもうけた。彼女が町に移つて下宿生活をしている間も、兎角の評判が絶えなかつた。其後結婚して今は寡婦となつて居り、娘にも適當な青年を得させ、自分も再婚し平和に暮そうと考えている。併し善惡の觀念の截然たる南部の小都市では、昔の惡名をそそぐのは容易なことではなかつた。隣りに偏狹な人が住んで居つた爲殊にそれは難かしかつた。隣家の主婦 Lucy は、「神の確かな手はお前さんと Lily を、お前さんがたの當然居るべき場所へ送るでしよう。」(ch. Two) と呪を以て豫言したが、正にその通りになつた。母も娘をば自分のような生涯に入らせたくないと思い、娘も母のようにはなりたくないと常に思いながらも結局正常の結婚に入らぬ。Mollyはもう年齢も進んで居り、今は醜く肥滿して最早男性を惹きつける魅力がなくなつている所に不幸がある。彼女の家に來た行商の Belly

も Molly を相手にせず、偶々遊びに來た牧師の妻 Christine と忽ち出來てしまい、彼等は駈落をする。が取り殘された Molly は自分が駈落したかつたと歎く。この作では女主人公は待機しているが結局性行動としては passive に終つている。Christine が駈落する前に、牧師の妻としての生活が如何に佗しかつたかを友に訴えて、"I never did feel that I was really married to Charles." (ch. Sixteen) と言う所に性の切實さが表われている。去られた牧師が、"I don't understand it——I was always a good husband to her. Why does a woman do a thing like that——what possesses her?" (ch. Seventeen) と女心の不可解さを憾みながら自殺するが、動物型と人間型の不調和による悲劇である。

Ⅳ

次に冷酷性について考えたい。ここに冷酷性というのは unfeelingness の意で、殘虐性を指さない。無感覺性或は非情性を言う。ただ非常性という言葉は周知の通り屢々 Hemingway 等と結ばれて論ぜられる hard-boiled の譯語として——作家の感情の表現を極度に抑壓した客觀的描寫の態度を指すテクニックとして——用いられているので、これを避ける爲に冷酷性という言葉を用いる。ここでは作中人物の言動を通じて見られる人間性の冷酷な面を指している。

Naturalist の描く世界には殘虐性はつきもので、Caldwell の場合もそのような場面が非常に多い。例えば colored people に對する殘酷な仕打は彼の作品の隨所に表われている。*Place Called Estherville* の Ganus の撲殺、*Trouble in July* (1940) に於ける Sonny のリンチ、*Journeyman* の Hardy の傷害等。白人同志の間では *This Very Earth* (1948) の Dorisse 殺害、*Tragic Ground* (1944) の Rubber の慘殺、*God's Little Acre* の兄殺し、*A House in the Uplands*, (1946) の Grady の仕打とその最後等々毎卷その例にこと缺かぬ。併しここに言う冷酷性というのはそのような惡意に滿ちた積極的行動を起さす殘忍性を論じようとするのではない。自己又は他人のなす非人間

的行爲について善惡の判斷もなく、何等の人間的感情をも示さない無感覺の狀態を指すのである。惡意をもつ行動についてはわれわれは憎しみを感じるであろうが、このような無感覺の狀態には個人的な憎しみの感じよりも、その非人間性に先づ驚き呆れる。そしてこの冷酷性を生むものは人間の持つ獸性によることに氣づくとき、われわれは肌寒き思を感ぜずには居られない。

Tobacco Road に於て Jeeter の母である老婆の存在は全く無視されている。初めての登場は老婆が二月の劇しい風に吹きまくられながら、跛ひきひきタバコ路を横切つて薪を拾いに行くところであるが、古い案山子とも見紛うようなボロ服すがたで、足には靴の代りに馬具の切れ端を結びつけている。食物も殆んどない貧しい暮しであるから衣服のひどいのは已むを得ないとしても、No one paid any attention to her. (ch. II) と誰一人彼女に氣をつけている者がない。食事についても祖母さんのことなどは、どうでもよかつた。皆が濟んだ後で殘りのチーズの皮か、クラツカーの屑が與えられるだけだつた。誰も彼もこの祖母さんに就いては、いつも邪魔になるなとか、パンや肉を食べるのを止めよとかいう以外は言葉をかけなかつた。相手にされないが食事時に臺所に火を燃やしていると、神樣がきつと食事を惠んで下さるかも知れないと、いつもそんな望みをかけて、枯枝を集めてくるのであつた。この祖母さんに災難がふりかかつた。

女牧師の Bessie が Jeeter を自動車に乘せる乘せないの問題から喧嘩になり、彼女が Dude と二人で Jeeter の家を飛び出す時のことである。車は喧嘩を見るため庭を歩いていた祖母さんを轢き倒して行つた。自動車の去つたあと祖母さんは固い白い砂の上に顏を潰されたまま横たわつていた。Jeeter の妻 Ade は夫に尋ねる。"Is she dead yet? She don't make no sound and she don't move. I don't reckon she could stay alive with her face all mashed like that." (ch.XVIII) あんなに顏を潰されては、もう生きてはいまいと言うが、Jeeter は返事もしない。まだ先刻の喧嘩に囚はれていて、他の事に心を煩わす餘裕がなかつたのかもしれないが、もう一度祖母さんの方へ眼をやつただけで立ち去つた。He took another look at the grand-

mother and walked across the yard and around to the back of the house. (Ibid.) 妻も妻である。暫く眺めていて家の中へ引込んでしまう。Ada went to the porch and stood there looking back at Mother Lester several minutes, then she walked inside and shut the door. (Ibid.) 暫く後に末娘 pearl の夫 Lov が來て祖母さんの倒れているのを見て Jeeter にどうしたのかと尋ねる。Bessie の自動車にやられたのだと聞かされる。

"Looks like she's dead," he (Lov) said. "Is she dead, Jeeter?"

Jeeter looked down and moved one of her arms with his foot. "She ain't stiff yet, but I don't reckon she'll live……" (Ibid.)

死んだらしいねと言われて足で母の片腕を動かして見る Jeeter である。この底知れぬ冷酷な非人間性は、併し惡意を以てなされた積極的な行動ではない。

新婚の Bessie と Dude とが McCoy までドライブした時のこと、前にゆく二頭曳の荷馬車に突込んで、乘つていた禦者の黑奴を殺してしまつた。家へ歸つてから、新品の自動車のフエンダが捩じ曲り、右のヘツドライトがなくなつているのを、如何した故かと問われると、"It was that nigger," Dude said. "If he hadn't been asleep on the wagon it wouldn't have happened at all." (ch. XIV) と、Dude は黑奴が眠つていたから惡いのだと言う。その黑奴が怪我しなかつたかと問かれると、そんなことは知るものかと嘯いている。Jeeter も、"Niggers will get killed. Looks like there ain't no way to stop it." (Ibid.) と、黑奴はよく殺されるもので、これは止めようもあるまいと見ている。前にも述べた通り黑人が白人に故意に害される場面は Caldwell の世界では極めて普通のことである。「黑人に事を起すのは白人である。」という訴は隨所に表われている。

"It's white-folks' fault," Hardy said, "……It's the white folks who always make trouble for the colored." (*Jouruneyman*, ch.IV)

Ruby said to Chism……"It's the white man, mister. They're the

ones who make all the trouble for us colored girls. You know yourself that's the truth, mister. It's the gospel truth." (*This Very Earth*, ch.VI)

"The Good Man knows that's the truth, Miss Kitty. I (Ganus) hate to say it, but it's the white folks who always do the harm." (*Place Called Estherville*, ch.IX)

これら黒人の白人に對する怨言を繰返し聞かせる所に Caldwell の狙があるのであるが、併しこれらは故意の虐待であるからここでは取扱わない。偶々轢き殺した黒奴に對する Dude らの無感覺性が問題である。

Jeeter には 17人の子があつたが 5 人死に、殘り12人のうち今家に居るのは 2 人だけである。居所の判然としているのは、近くの Lov へ嫁にやつた Pearl だけである。彼女は近くに居りながら、一年前に嫁に行つたきりで一度も親の所へ顔を出さない。他の連中からは勿論全然音沙汰がない。大方はどこに居るのか見當もつかなかつたが、長男の Tom は噂によれば20マイルばかり離れた隣の郡で成功して居るらしい。併しこれも何の便りをも寄こさない。Jeeter が Fuller の町で聞いた噂によると息子は枕木の請負で相當金を儲けて居り、その商賣には五六十頭の騾馬と百頭からの牛を使つているということである。Jeeter は Tom が毎週幾ドルかを彼に呉れるだけの餘裕があるとみていたので、そのうちに頼みに行こうと考えていた。出かける計畫だけは度々立てたが、自分のボロ自動車ではそこまで無事に行けそうもないので斷念していた。末子の Dude が Bessie と結婚して新しい自動車が手に入つた時、親父の代りに Tom に逢いに行つた。歸つて來た Dude らに Jeeter が訊ねる。「俺にくれた金はどこにある。」すると「トムは金なんぞ渡しはしなかつたよ。お前さんを助けようなどとは、てんで考えていないようだ。あのトムつて人は惡黨ですね。」と Bessie が報告し更に言う。「お前さん方が動けなくなつたなら郡立救貧農園へ行けばよいと言つていましたよ。」その上 Dude は "Tom said to tell you to go to hell, too." (ch. XVII) とつけ加えたので、長男も大分變つたなとは考えていた Jeeter も、信ぜられぬこの暴言によつて一大衝撃を

うけた。

この様な冷酷な型の長男は *God's Little Acre* にも現われる。TyTyの長男の Jim Leslie は黄金熱にとりつかれている父親に愛想をつかし、15年前に家を出た。今は Augusta の町で綿花の仲買人として成功している。TyTy が娘への求婚者 Pluto に向つて、子供らが全部ここに留つていて、わしを助けて呉れないのが情けないことだとこぼしながら、長男の噂をする。「ジムは若い時分から少し變つていて、わしらとは附き合おうとしなかつた。今でもわしに会うと、お前さんは誰だいと言わんばかりの顔をしている。あいつのお袋が死ぬ前に一度会いたいと言うから、あの町へ連れていつたことがある。あの丘の上の白い大きな家へ行つたんだ。所が誰が來たのか解るや否や戸に鍵をかけて入れやしない。あいつのあんなやり方がお袋の死を早めたのだと思う。お袋はそれから一週間もたたないうちに、病氣にかかつて死んでしまつたのだからな。あいつはわしを恥かしく思つてるという風だつた。今でもそうだが。……わしはあいつの親なんだが、どうしてああなんだか譯がわからない。」(ch. II)

長女の夫 Will が、その Jim から金を借りたらよかろうと Jeeter にすすめると、何を馬鹿な、とんでもないことだと言い、「ジムは街で会つてもわしに口をきこうとせんのだ。そんな男がわしに金を貸す筈がない。頼むのは無駄骨だ。」と答えていたが、更にすすめられて借りに出かけることになり、Darling Jill と Griselda を連れて行く。息子の家は丘の屋敷町にあつて三階建、白い圓柱が屋根までものびている廣いポーチのついた大きな邸である。恰度戸の鍵がかかつていなかつたので TyTy が案内なしに入る。

"What are you doing here?" Jim Leslie said. "You know I don't let you come here. Get out!……Who let you in?" (ch.XI)

Jim は侵入者を冷たく撃退しようとするが TyTy の後に控えている弟の嫁 Griselda が目につく。こんな美しい女がどうして Buck などの女房になつて田舎に引込んでいるのだろう。これ位の邸に住むのが相應しいのにと考える。こうした隨伴者のあつた故であろうが、TyTy はこの訪問で首尾よく 300 弗の借出しに成功して引上げた。この Jim が後に Will が殺されて TyTy 一家

の女たちが歎き悲しんでいる最中に、この事件は知らなかつたのであるが、突然自動車で乘りつけた。15年振りの生家訪問である。が久し振りで会つた家人への挨拶もなく、いきなり Griselda はどこに居るかと父に尋ねて連れ出そうとする。その女は弟の妻であるが、誰れの女ということは今彼の意識に無かつたのであろう。止める父にも僕はいそいでいるんですと言うだけである。この結末は勿論兄弟の爭となり、弟は獵銃で兄を殺すに至るが、Jim の行動も冷酷性以外には說明がつかないように思われる。

又 TyTy はわしは科学的な男であると言いながらも、Pluto のすすめによつて白つ子を使つて金鑛のありかを占わしめることになる。白つ子が郡の南の沼地に住んでいると聞くと、大喜びで早速息子だちを連れて自動車を飛ばす。Marion の向うの沼地近くの家に居る白つ子をつかまえて無理やり縛り上る。女房が「Dave どうしたの」と叫ぶと、「こん畜生めら俺をふん縛りやがつた」と答へる。女房は喚きながら走り去つた。首尾よく摑えて家へ歸つてから TyTy は言う。"She was his wife, I reckon, but I can't see what an albino has got business of marrying for. It's a good thing we brought him away." (ch. VIII) と白つ子に女房のあることが不思議なのである。そして彼が逃げ出さないように鐵砲を持つた黑奴が明け暮れ番をすることになる。その白つ子が Darling Jill と視線を交わし微笑しているのを認めた時、初めて TyTy はこの青年も實際の人間なのだと考えつく。Up until then TyTy had not for a moment considered Dave a human being. (ch.IX)

Episode in Palmetto に於て農產物仲買人の Thurston は Chicago 行きの賞金欲しさに大量の稷作りを農家 Em Gee に說きすすめる。そして農事に專心させるには良い女房を持たせるに限ると考えて、女教師 Vernona を世話しようとする。Thurston は賞金が入りさえすればよいのである。Em Gee が如何に稷作りが嫌であろうと、Vernona が如何に百姓を毛嫌ひしていても、そういう當事者の心などは全然考慮していない。執拗に自分の計畫を進めようとして遂に百姓と喧嘩になり、双方とも拘置所に入れられる。

一方 Thurston の妻 Jenny は夫のために保釋金を出してはどうかと、下宿の亭主 Ash にすすめられても、夫の縛られたのはもつけの幸いとばかりに遊び歩く。

"Why won't you bail him out? Ash asked. "Because it's exactly where I want him to stay as long as they'll keep him, that's why." "That's sort of hard on Thurston, ain't it?" "The harder, the better." (ch.VII 3)

と平然と言うが、この妻の場合は夫の無感覺的冷酷性を上廻る意地悪さが感ぜられる。

V

Caldwell は naturalism の作家であると考えられている。 Naturarist は人間が動物として有する自然性——それは倫理道德等の外袍束縛をぬぎ棄てた裸の人間のもつ謂わば獸性——の內面的な動きや外部への反應を、筆に衣きせることなく描かんとする態度をとる。隨つてその作品には醜惡悲慘な場面が極めて多い。そして醜も慘も「眞」を寫すと言う。彼等の文学にとつては「眞」が目的であつて、「美」は問題ではない。藝術論には眞は美なりという主張もあるが、事實彼等は表面の美が文学の必須條件であるとは考えていない。

Caldwell の作品にもたしかに醜と慘の要素が漲つていることは、上來述べ來つた通りである。所で彼は「眞」を描いているのであろうか。

1933年 God's Little Acre が猥褻の廉を以て New York Society for the Supression of Vice により告訴された場合、Benjamin E. Greenspan 判事は "Truth should always be accepted as a justification for Literature." と「眞」の尊嚴を斷じて告訴を却下した。(註2) それでは Caldwell の描いた「眞」とは何であろうか。この訴えは淫猥なりや否やに關する件であるから勿論判事の斷は性についてである。そして性に關する興味が彼の作品に大衆を惹きつけたことは事實であろう。併し Caldwell の初期の作品が專門批評家たちにも高く評價され、或はソヴィエットに於いても彼の作品

に人氣があつたと言われるのも、その性の問題の爲のみであろうか。否、それはそのような原始的な性行動を營む下層社会が存在するという事實の故であろう。そういう眞實に基く經濟的な社会抗議性が問題なのである。Caldwell は *Tobacco Road* や *God's Little Acre* によつて南部貧農の代辨者として高く評價せられたのである。その眞實性をめぐつて *New York Times* と *Evening Post* の兩紙はディスカッションを行い、*Augusta Chronicle* は所謂 Sand Hills region (Augusta から約40哩の地點) を調査し、彼の小說の如き狀態の家族が數軒實在すると報じている。(註 3)

後期の作品に對しては概して評價が低い。そこでは社会抗議性が失くなつたかというに、そうではなく、經濟的なものの代りに倫理的な社会抗議性が依然として存する。後期作品の女主人公の不安は同時に近代人の不安でもある。近代人に冷淡な一面があるかと思えばその反面他人のことに容喙し、聽き耳をたて、覗き見する隣人が尠くない。例えば *The Sure Hand of God* の隣家の主婦 Lucy (ch. Eight) や *Episode in Palmetto* の下宿の向いの婦人 Mrs. Yeager (ch. IX 3) が象徵するように、偏狹な小道德觀にたてこもつて、所謂小姑根性の如く他人の言動に關心を持つ人々である。ここから現代社会の「隣人の監視」による不安が生ずる。又黑人のもつ不安は餘りにも普遍化している。白人對黑人の感情は永久に相容れぬ二つの流れであろう。後期作品の扱う惡は舞臺は等しく南部にとつているが主題は一般化された問題である。初期の惡は一見一部の惡の觀をもち局地的惡として抗議の焦點が鮮明に見える。これに比すれば後期の惡はその普遍化の故に抗議性も輕く受け取られているが、しかし「眞」は依然としてそこに存在しているのである。

Caldwell の世界は白人貧農や黑人の生活を緯糸とし、性意識を經糸として織り出された繪模樣と考えることが出來る。Grotesque な horrible な事件の客觀描寫の巧みさは Hemingway に類するとは批評家の認める所であるが、(註 4) 彼には Hemingway の扱う如き戀愛ものはない。描寫は前述の通り naturalistic であるが、好んで下層民を對象とする所に彼自身の humanist たる本質が窺われる。Natralism は humanism に對するレジスタンスであると

の考えは世界觀について言う問題であろうが、偶々これを Caldwell の場合その手法と人生觀の問題として轉用出來そうである。

資力なきものは近代農業經營には無緣の徒たることを悟らずに、依然土地への執着をたち切れぬ貧農の群。下層社会に於ける沒道義觀、それは道義の頽廢ではなくして道義以前の狀態である。貧困と獸性の共存する泥沼。無智を母胎とする神への信仰。環境惡と個人善意の逼塞による享樂と諦觀。神の確かな手に象徵される決定論的宿命觀。Trouble maker は白人か黑人かの問題。これらの醜を好んで描いて居るが、眞意はこれらの問題が救い難きものとして書き棄てられたものとは思われない。救治策の提案はもとより文士本來の業ではないかも知れないが、例えば黑人對策として"The way to handle the colored is to stop treating them the way Grady Dunbar treats them and let them go to school and get an education and earn their living like the rest of us. There's plenty of room in this big country for all of us, black and white alike." (*A House in the Uplands*, ch. Seventeen; Judge Lovejoy の言) の如く作中人物に語らせている點など注意を要する。

以上對照の必要から初期と後期の作品を中心に諸特徵の推移を考えて見たが、それでは中期の作はどうかとの問題が殘るであろう。Caldwell は戰時特派員としてソヴィエト赴いた關係から、戰爭關係のものが二三あるが、(*All Night Long: A Novel of Guerrilla Warfare in Russia*, 1942; *All-Out on the Road to Smolensk*, 1942) これは寧ろ際物的な意義を持つものと考えられる。これらを除き彼は依然として南部の下層民の黑人を對象としている。*Tragic Ground* では戰時中に農を棄てて都会の工場へ移つたものが、突然の工場閉鎖で忽ち貧民街に入る。鄕に入つては鄕に從わんとする家族と、なお子女の墮落を防がんとする家族との對比が畫がかれている。*A House in the Uplands* は珍らしく農業貴族を主人公とするが、その自壞作用と之を救はんとする努力が示され、階級沒落の過程を暗示している。兩作品は共に甲斐なき抵抗と諦觀の世界を描いているのである。*This Very Earth* は父祖の業たる農を棄てて都会に出るが正業につかず、子女の墮落に手を拱いている父親の姿

が描かれている。これは *Tragic Ground* と共に、土を離れた人々の悩み、即ち一度都会の生活に染んだ者の魂は、再び農の素朴に還らぬことを示している。そしてそこに大地への信頼——神への信仰と共に——が失われて、動揺と不安がはじまることを示す。中期のものはこのように初期から後期への過渡的な特徴を表わすものとして意義を持つている。更に Caldwell に就いては茲に觸れなかつた短篇の世界や、全作を通じての喜劇性の問題等があるが、これらは改めて論ずる機会を得たい。

註1. Mrs. Caldwell, a small, attractive woman met with some hostility as being too youthful-looking and brightly dressed to be a minister's wife.
(Robert Cantwell: *The Humorous Side of Erskine Caldwell*, Introduction p.11)

2. Appendix to the Fifth Printing of the Viking Press Edition, E. Caldwell: *God's little Acre.*

3. Robert Cantwell: *The Humorous Side of Erskine Caldwell*, Introduction p.20.

4. Fred B. Millett: *Contemporary American Authors*, A Critical Survey, p. 35.